



## ここから・小種から

大仙市立小種小学校長 山崎 敏

小種を包み込むように流れる雄物川の水面が優しい色に変わり、百三十四回目の春・閉校の春を迎えました。沿革誌を繙けば、およそ四万八千八百日もの時間の流れの中で積み重ねられてきた営みが細かに記されており、それだけの時にこの学校とともにあった方々の熱い思いが凝縮されていて、どんな名作映画や大河ドラマよりも圧倒的な迫力で私に迫ってきます。

この地における営みは全て、地域や児童の願いに応えようと、僻地・小規模校の特性を活かしながら、小種の子たちのために全力で指導に当たってこられた歴代教職員の研鑽・努力と、保護者・地域住民・関係各位のご支援と献身的な協力に支えられてきたものであり、本記念誌にも記されているように、確かな実績と輝かしい伝統を刻んでまいりました。

僻地教育は教育の原点であると言われますが、教師と子ども・子どもどうし・保護者や地域住民と子ども・保護者どうしの関係が密接な中で営まれてきた本校の教育は、どんな地域のどんな学校の営みにも負けない大いに誇れるものだったのです。

しかし、本来効率論には馴染まない教育の世界ではありますが、留めようのない過疎化と少子化、行政の広域化・効率化の波が押し寄せ、誇れる教育を展開してきた本校も統合のやむなきに至ったことを思うとき、やはり残念でなりません。

私たち本校最後の年に勤務する職員は、閉校の年のこの学校に勤務する「やりがい」「誇り」「喜び」を共通の思いとして、子どもたちに豊かな心と確かな力を身に付けさせるべく精一杯努力してきましたつもりです。

おかげさまで、校歌に「今日もすこやかに学ぶわれら」と歌われているように、小種の子らは子どもらしい素直さと明るさとかしこさを持ち、学校を訪れる多くの方々からは、その好ましい姿にお褒めの言葉を頂戴することが多くなりました。

今年度、「LAST KOTANE 2007」として沢山の記念活動に全員で取り組み、多くの思い出を紡いだ子どもたちは、その思い出を糧に、きっと統合の波をたくましく乗り越え、協和小学校で大いに活躍してくれることでしょう。

閉校は小種地域の終焉ではなく、ここから・小種から、新しい学校へ、新しい時代へのスタートなのだと思いたいと思います。子どもたちの前途が洋々たることを、そして小種が、ここに育った子どもたちにとって、いつまでもあったかいふるさとであり続けることを願っております。

最後に、百三十三年十か月にわたって本校を支えてくださった全ての皆様と、閉校にかかわる数々の事業にご支援・ご協力くださいました関係の方々へ衷心より感謝を申し上げます、閉校のごあいさつといたします。